

聖愚問答抄

今の世は濁世なり、人の情もひがみゆがんで権教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし。此の時は読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよとなり（中略）今の世を見るに正法一純に弘まる国か、邪法の興盛する国か勸ふべし。
（御書403頁）

【通釈】

今の世は濁世である。人の心もひがみゆがんで、権教の謗法ばかりが多いので、正法は弘まりにくい。この時には、読誦や書写の修行も、観念・工夫や修練も無用である。ただ折伏を行じて、力の限り大いなる勢いをもって謗法を破折し、また法門をもって邪義を呵責すべきであるということである。今の世を見て、正法のみが純粹に弘まっている国か、邪法の盛んな国か、よくよく考えるべきである。

【主な語句の解説】

①濁世

→濁り汚(けが)れた世の中。悪事が盛んな末法の世相。

②権教

→権は「仮り」の意。法華経以前の諸経。

③観念

→深く心を込めて念じること。観心・止観等とも称す。

④工夫

→禅宗が修行に用いる語で、「坐禅にはげみ専念すること」の意。

⑤修練

→人格・学問・技芸などが向上するように、心身を鍛えること。

⑥一純

→一はもっぱら、純は純粹の意。純一。

【背景と大意】

本抄は、文永五（1268）年の御述作で、対告衆は不明です。上下二巻からなり、題号に示される「聖愚」とは、法華の正法を弘通する聖人と、仏法の道理に昏(くら)い愚人のことで、七段の問答形式で構成されています。内容は、儒教をはじめ、律、真言、禅、念仏などの信仰を遍歴する愚人が、聖人と巡り合い、様々な質問をしつつ、聖人に破折・教化され、ついに妙法に帰依する過程が述べられています。

拝読の箇所は、濁世で権教の謗法が蔓延している末法においては、正法・像法時代のような観念・工夫等の修行は無用であり、ただ妙法を持ち、折伏を行じて謗法を砕き、邪義を破折していくことの大事を御教示されています。

【参考御書並御指南】

『聖愚問答抄』

「邪正肩を並べ大小先を争はん時は、万事を闇(さしお)いて謗法を責むべし、是折伏の修行なり。此の旨を知らずして撰折途(みち)に違はゞ得道は思ひもよらず、悪道に墮つべし」
（御書402）

日如上人御指南

「もし『折伏などをしなくとも、朝晩の勤行をして、お寺の御講や座談会にもそこそこ参詣していれば、それで充分』などと考えていたら、それはこの御金言に反することになります。御本仏の御金言に背いた信心をしていたのでは、絶対に幸せにはなれません」
(大日蓮・平成22年2月号)

日如上人御指南

「折伏は一切衆生救済の慈悲行であります。邪義・邪宗の謗法の害毒によって蝕まれ、苦悩に喘ぐ三毒強盛の衆生の心田に、本因下種の妙法五字を下種し、もって即身成仏の境界へ導く最高至善の仏道修行であり、大乘中の大乘たる地涌の菩薩の眷属に与えられた尊い使命であります。されば、大聖人様は『聖愚問答抄』に、「今の世は濁世なり、人の情もひがみゆがんで権教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし。此の時は読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよとなり（下略）」（御書403）と（中略）したがって、大聖人様は諸御書において、法華経の敵を見ておいて責めもせず、折伏をしない者、それは涅槃経で言う『慈無くして詐り親しむ』者であり、『仏法中怨』の者すなわち、仏法の中の怨であると断じているのであります。しかし、これほどまでに大聖人様が折伏をしない者に対して厳しく仰せられているのは、逆説的に言えば、折伏を行ずる者の功德がいかにか大きいかをお示しあそばされているのにほかならないのであります（中略）今ここで最も大事なことは、折伏の功德がいかにか大きいかを頭でいくら理解しても詮ないことで、さらに一歩進んで、理屈ではなく、我々自身の折伏の実践から、その功德を体験していくことが、最も肝要なのであります」
(大日蓮・平成30年5月号)